

「ZAIDAN Report」第21号では、「福島大学災害ボランティアセンター」様の活動をご紹介します。

震災から15年が経過した現在も、復興公営住宅や小学校などに赴き、支援を必要とする方々と出会いながら、それぞれの地域で生じた地域課題の解決に向けた活動を継続している、当財団の2025年度の助成先である学生団体「福島大学災害ボランティアセンター」様についてご紹介します。

「福島大学災害ボランティアセンター」様についてご紹介

【沿革と活動理念】

- 東日本大震災を契機に設立された学生ボランティア団体です。震災から15年が経過する現在もなお、復興・生活支援をメインに活動を展開しています。
- 震災によって分断されたコミュニティの再構築や、長期化する避難生活に伴う心身の不調、風評被害といった地域固有の課題解決を目指し、「孤立させない」「心身の健康の維持」「子どもや地域の未来づくり」「被災地域の課題対応」の4つを活動理念に掲げています。

【運営体制】

- 現在はマネージャー約30名、一般登録者約240名が所属しています。福島大学の1年生から4年生まで学部を問わず参加できるだけでなく、年齢制限を設けず学外の方も広く受け入れています。
- 専門知識の有無に関わらず、誰かのために動きたいという思いを持つ多様な人々が集い、活動できる開かれた組織です。

【現在の活動】

- 有事の被災地支援に加え、平時は複数箇所の復興公営住宅や帰還地域において、定期的なサロン活動等を通じたコミュニティづくりに力を入れています。これは、新しい生活環境での孤立死や自死、関連死を防ぎ、住民同士の交流を促進することで、安心して暮らせる地域社会を再構築することを目的としています。
- また、子どもたちに向けた学習支援やキャンプなどの活動も行い、健やかな成長と地域への愛着形成を図っています。

【マネージャーの集合写真】



【南相馬でのコミュニティづくり活動】



【檜葉小学校での子供たちとのふれあいの様子】



【キャンプでのふれあい活動】



【子ども仕事体験フェスタへの参加】



【団地のお祭りへの参加】



支援活動を通じて生まれたプロジェクトたち

福島大学災害ボランティアセンターでは、その活動を通じて数多くのプロジェクトが生まれていますが、その中から代表的なものを紹介します。

①『いるだけ支援』

- 2015年の復興庁「心の復興」事業にも採択されたプロジェクトで、学生が交代で仮設住宅に居住することにより、仮設住宅に住まう一生活者として簡易な生活支援や声掛けをし、「孤立死・関連死・自死」をなくすという試みです。
- 福島市内の避難者支援を継続的に行う中で、仮設住宅の空室の増加と住民の高齢化が進み、住民の方々が寂しさや生活感の喪失を感じるという深刻な課題に直面しました。そのような中で耳にした「若い人の「おはよう」「こんにちは」という声が聞こえるだけでも心が和む」という仮設住民の声がきっかけとなり生まれました。
- このプロジェクトは、約3年間、福島市内2箇所の仮設住宅で行われ、たくさんの住民の方々と出会い、多くの繋がりができましたが、2018年4月末をもって仮設住宅の収束とともに終了しました。

②『集まれ！ふくしま子ども大使』

- 2013年から2022年まで計10回開催された、全国に福島県への関心・理解がある「子ども大使」を育て、災害の風化抑制、福島の安全性をPRする活動です。(2020・2021年度は、新型コロナウイルスの影響でオンラインでの実施となりました。)
- 全国から小学生を福島県に招待し、福島県の魅力や東日本大震災について考えるさまざまなプログラムを通して、復興や防災への意識向上と、子どもたちの交流を通じた大人になっても続く関係づくりを支援しました。

今回の助成申込に至った背景

- 東日本大震災から15年が経過し、被災地支援のフェーズは「物理的な復興」から「高齢者の孤立防止とコミュニティの維持」という長期的な地域福祉の課題へと完全に移行しています。
- この変化に伴い、かつて存在した復興支援を目的とする各種助成金は年々減少し、長期的かつ日常的なコミュニティ支援を継続するための資金確保が、私たちの大きな課題となっていました。
- 現在、全国的に高齢者の孤独死や関連死が増加し続ける中、私たちが復興公営住宅や帰還地域で行っているサロン活動やむらづくり活動は、まさに高齢者の孤立を防ぎ、地域での助け合いの環境を整えるためのものです。
- 資金難により活動の縮小を懸念していた折、太陽生命厚生財団の「在宅高齢者等の自助・自立の意欲を引き出し、生活の支援・向上に資する事業」への助成趣旨を見て、私たちが目指す住民の主体性を引き出すコミュニティ支援の目的と極めて深く合致していると考えました。
- 社会的な復興の枠組みが縮小しつつある現状において、このような支援が、孤立の危機にある高齢者の生活の質(QOL)を保ち、住民の方々の自立を促す弊団体の活動を途切れさせずに継続・発展させるための不可欠な力になると確信し、応募に至りました。

助成事業の成果

助成金を活用し、「印刷製本費」による広報活動の強化と、「消耗品費(食材費・文具等)」によるサロン活動の質的向上を図ることができました。これにより、以下の3点において大きな成果を得ています。

1. 効果的な広報による「孤立層」の外出促進

- 助成により、文字が大きく温かみのあるデザインのチラシやポスターを十分な数量印刷し、全戸への手渡しや投函を継続的に行うことができました。
- 定期的に視覚的な情報が届くことが参加への心理的ハードルを下げ、これまで引きこもりがちだった方が「チラシを見て来てみた」と足を運んでくださるなど、確実な外出のきっかけを生み出すことができました。

2. 食や工作を通じた「役割と生きがい」の創出

- 充実した食材や質の高い工作・文具用品を用意できたことで、サロンのプログラムが多様化しました。一緒にお茶の準備をしたり、季節の行事に合わせた工作を行ったりする中で、参加者同士が自然に教え合う場面が増加しました。
- 出かける楽しみができただけでなく、参加者が学生や他の住民に対して何かをしてあげるといった明確な役割を持つことができ、自己有用感や生きがいの創出に直結しています。

3. 双方向性の関係構築とコミュニティの再生

- 活動環境が整ったことで、私たち学生も余裕を持って住民の皆様と向き合うことができました。
- 一緒に作業を進める中で、住民の方々から震災当時の経験や生活の知恵を伺う機会が自然と生まれ、一方的な支援ではない双方向の温かい関係性が構築されています。
- 結果として、初対面の住民同士でも会話が弾み、地域内で顔の見える関係が再構築され、孤立死や関連死を防ぐための地域のセーフティネット強化に大きく貢献することができました。



【サロン活動(芋煮会)】



【キャンプで子供たちと一緒に作ったナシゴレン】



【サロン活動(餅つき大会)】



今後の抱負など…

- 今回の助成事業を通じて確立できた住民の皆様との双方向性の関係を、今後も大切に育てていきます。私たちが訪問し交流の機会を創出することが、高齢者の皆様の孤立防止と心の復興に直結しているという実感を胸に、対象地域のニーズの変化に寄り添いながら活動を継続します。
- また、学生自身も住民の皆様から多くの学びを得ているため、この貴重な経験と構築した地域との信頼関係を後輩たちへしっかりと引き継ぎ、長期的な視点で福島の地域社会の向上に貢献し続けていく所存です。